有田の年越し行事

もういくつ寝るとお正月　お正月には凧あげて
独楽を回して遊びましょう　早く来い来いお正月
（滝廉太郎／作曲　東くめ／作詩）

〔新春・三題　川浪　養治 画〕

皆さんもご存知の「お正月の歌」、もうすぐ21世紀最初のお正月です。実は旧暦から新暦に変わったのは明治５年（1872）12月３日で、この日が元旦となりました。佐賀県下で一番早く新暦を採用したのが有田なのです。

昔から伝わる有田の年末・年始風景を紹介します。

①正月の準備　師走の吉日を選んでスス払いをします。葉のついた女竹に半紙を水引で止め、これで家の内外のススを払うのです。今はススが殆どなくなりホコリを落とすために払います。

②大晦日　年越しそばのことを「ウンソバ」といいます。それはそばに少量のうどんを混ぜて食べるからです。来年には「運が側に寄ってくるように」との願いからです。５区中の原の八阪神社では大晦日の21時から「お火焚き」がはじまります。23時を過ぎると参拝者にウンソバが振る舞われます。除夜の鐘が鳴るころには参拝者で境内は一杯になります。

③餅つき　昭和15～16年頃まで、朝早くから餅つきさんが武内（武雄市）、宮野（山内町）等から有田に来ていました。蒸籠で蒸した糯米を「セッカ」と言い、そのおいしいこと。これを持参の木の臼でつくのですが、ペッタンコ、ペッタンコの軽やかな杵の音のリズムが、子供たちにはたまらなく心躍るものでした。大きな板の台に、ついた餅をのせ、おかみさん達が手を水で冷やしながら熱い餅をまたたく間に鏡餅、手丸餅、ナマコ餅に作り上げていったものです。

12月29日は９が「苦」につながるといって餅をつくのを避けたものです。

④お供え　神棚、仏壇、床の間、水神さんには鏡餅を、便所の神様には丸餅をお供えします。家庭により若干の違いがありますが、半紙の上に昆布やスルメを置き餅をのせます。餅の上には末広がりということで八の字に敷いたモロムキに橙、干し柿を重ねます。餅は鏡、橙は玉、柿は刀を表し「三種の神器」を意味します。

一方、三方には半紙の上に米を盛り、その上に橙と炭（半紙に水引で包む）と山から採ってきたトコロ（葛の根）をのせます。これは「代々住む処」という意味があります。また、「芽が出る」ことを意味するツノ（角）の出た芋頭を飾る家もあります。もちろん、窯元では窯の上やロクロの上にも鏡餅をお供えします。

⑤元旦の一日　元旦は夕方まで玄関を閉めて、家族水入らずのお正月をしたものです。子供たちは年玉をもらうのが楽しみで、カルタや羽根つき、お手玉をしたり、親は子供たちの話をじっくり聞いたりして過ごしました。

元旦の朝は日の丸をたて、神・仏と先祖や鏡餅にお参りをし、お屠蘇をいただきます。お屠蘇には小さく切ったスルメや昆布がつきものです。そして茶ノライ（茶の直会）をします。これは半紙の上に昆布・干し柿・スルメ・みかん・干菓子をのせ各人の前に置きます。この後、おせち料理と雑煮で元旦を祝います。雑煮には昆布・スルメ・蒲鉾・高菜（３センチ幅位）・あべかわの具を入れます。

⑥初荷　１月２日には荷馬車に「初荷」の幟を立て、勢いよく景気をつけて商売繁盛を願い、荷物を出荷していました。

まだまだ、たくさん有田の正月行事があります。例えば筆下ろし、初窯開き、帳祝い、鬼火焚き、もぐら打ちなどです。詳しくは「有田町史　政治社会編Ⅱ」、「有田の民俗」第７章年中行事をごらんください。

まもなく21世紀初のお正月、皆さん元気良く新年をお迎えください。（久富）

季刊
皿山　冬
No. 48
有田町歴史民俗資料館・館報

川浪養治（筍谷）が残したもの

ろくろの技とともに、焼き物の絵付けも有田の伝統のひとつです。それは器に対する絵付けの技術であるとともに、絵画の世界でもあります。絵画の世界から窯業の後継者を育てた人に川浪養治さんがいます。

このほど泉山の川浪正治さんより、父である故川浪養治先生の蔵書と写生画の数々を寄贈していただきました。当館ではこの機会に川浪養治さんの作品を見ていただこうと思い、これらの資料とともに町内外に所蔵されている作品を紹介する企画展「川浪養治（筍谷）～写生の心～」展を12月28日まで開催しています。

師　紫水のこと

川浪養治（以後筍谷と称し、文中の敬称は略します）は絵書きとして明治の名工の一人といわれた川浪喜作（竹山）の次男として生まれ、大正２年有田工業学校図案科に入学。ここで東京美術学校出の教師、藤井豊（紫水）に出会いました。

紫水は明治12年、東京駿河台で生まれ、父は上総（現在の千葉県）大多喜藩士。明治34年に東京美術学校を卒業しましたが、在学中は成績優秀で特待生でもありました。卒業後数度の兵役を経て瀬戸陶器学校や瀬戸陶磁器試験所などに勤務後、明治45年有田工業学校に赴任し、大正６年12月までの約６年間教鞭を執りました。当時の生徒には初代松本佩山もいて、紫水に日本画の指導を受けました。のちに佩山は古伊万里調から離れた新感覚の近代陶芸家の道を切り開いていきますが、それはこの時の紫水の指導によるところが大きかったといわれています。紫水が住居と定めたのは泉山の弁財天東側の高台の一軒家で、ここに妻と実父の三人で住んでいました。

◀写生中の川浪養治さん

▲大正から昭和にかけての有田工業学校（泉山）

筍谷の学生時代

のちに筍谷が住んだのは、奇しくも紫水が有田での生活を過ごした住まいの近くでした。筍谷は紫水の適切な指導もあり、また生まれつきの画才もあって有田工業学校を卒業後、上京して川合玉堂の画塾（長流画塾）に入門し、翌年玉堂が教授をつとめる東京美術学校に入学します。大正６年の日本画科の志願者は69名で合格者28名。その前年の卒業生に有田出身の鷹巣豊治（後東京国立博物館員）がいました。東京では当時小石川にあった西松浦郡の学生寮「丘偶舎」に入り、東大の小石川植物園や早大前にあった大隈重信邸に通って四季の草花をスケッチしました。大隈は庭園が自慢で、筍谷が有田出身だと知ると、木戸御免にした上お雇いの園芸主任を説明につけたといいます。その筍谷が卒業制作に描いたものがびょうぶ三枚大に仕上げた「石榴（ザクロ）」です。明治20年の東京美術学校時代から昭和28年に東京芸大となるまでに文部省は総数423点を買い上げましたが、その内の１点です。その中には第１回卒の横山大観から昭和27年卒の平山郁夫まで名だたる画家達がいます。卒業後そのまま中央での活躍も夢ではなかった筍谷は帰郷し、その後50年間、郷土の美術教育と窯業に献身しましたが、その行路を変えさせたのは大正12年９月、関東地方を襲った大震災でした。

故郷での筍谷

当時は緊急避難のつもりだったのが、筍谷の実力を知る人々に引き留められそのまま故郷に居つくことになります。以来佐賀県立鹿島中学、福岡県立八幡中学（いずれも旧制）を経て、有田工業学校、東有田中学校、曲川中学校から新制なった有田工業高校に奉職し、教え子の中に画家の納富進、13代今泉今右衛門、青木龍山といった陶芸家を輩出しています。筍谷によって写生の目を開かされたと述懐している人たちです。

教職を退いた筍谷は、小学校時代の同級生であった深川進から誘いを受け、深川製磁株式会社の研究開発室常勤嘱託として17年間、図案を指導しました。仕事の傍ら、嬉野や波戸岬などつとめて山野を歩き、花鳥の写生に専念しました。生前の筍谷を知る人々も、家の回りの花々を写生している姿をよく目にしています。子供たちが幼かったころは皆を伴い黒髪山越えで西有田町の竜門までスケッチに行ったこともたびたびでした。また、深川製磁や岩尾対山窯にあった水墨画のクラブの指導もしました。そのころは今のようにコピー機があるというわけでもなく、夜になると一人ひ

◀昭和8年の作品「香魚（あゆ）」（一七三・三センチ×七六センチ、絹本着色）個人蔵

とりに筆を入れる順番を書いたお手本を作っていました。そのような日々を送る中、写生で酷使した視力が衰えていたころ、昭和48年の春、京都の美術出版社「美乃美」社長垣本剛一が「有田の文様」シリーズで父竹山の画稿を借り受けるために筍谷を訪ねました。その折り見せられたおびただしい画稿が筍谷のものであることを知った垣本は、それらが「草や花や鳥になり切ってえがかれたものばかりだった。写実的でいて詩情がある。これだけの人は中央にだっていやしない」と直感しました。その後「有田の文様」シリーズの最終巻に筍谷を加え、さらに51年に「四季草花写生図」全十巻と「四季花鳥図」上下巻を出版しました。

筍谷は、他にも「竹堂」、「霞汀」の画号を用いましたが、「筍谷」も多用しています。特にこの号は焼き物の製品に多く見られ、陶画の分野では父にはかなわないという筍谷の思いがあったのでしょう。竹に対するタケノコ。筍谷は名工といわれた父竹山を終生敬愛していたといいます。

数度の目の手術と長い闘病生活の後、昭和60年の秋、永年の功績を認める関係者の奔走もあって文部大臣賞を受賞しました。しかしその授与式には出席できず末娘の静子が代理として出席しました。その賞状を囲んで喜びを共にする家族とワインで乾杯をした三日後、11月14日、静かに息を引き取りました。享年88でした。

（尾崎葉子）

※参考文献

・「肥前陶磁史考」　中島浩氣著
・「反骨の陶芸家佩山」　山本康雄著
・「東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第一、二巻」
・「２０世紀物故日本画家事典」　油井一人編
・「池忠の皿山遠景」　池田忠一聞き書き 森田一雄著
・「泉山区史」　金岩和夫他編
・「有田町史 政治社会編Ⅱ」　有田町史編纂委員会編

川浪養治（筍谷）
～写生の心～展

・期　間　　平成12年11月13日（月）～12月28日（木）
・場　所　　泉山　有田町歴史民俗資料館
・入館料　　無料
・展示品　　川浪養治（筍谷）作品
　　掛け軸、スケッチ、蔵書類
　　川浪喜作（竹山）作品
　　掛け軸、花瓶など
　　藤井紫水作品
　　掛け軸

※期間中展示替えを行います。
第１期　平成12年11月13日～12月３日
第２期　平成12年12月４日～12月28日

戸矢にある庵寺と槇の木

ご存知ですか、藩境の一本杉跡

10月29日（日）、前日までの雨で開催が危ぶまれた戸矢地区の歴史探訪があり同行しました。この日のために史跡の事前調査に来館された戸矢区長の松尾静さんより、道程に点在する神社や金山跡の説明を受け、参加者の方々も「こんな所があるのか」と身近にある歴史を再認識しながら神六山へ登っていきました。

途中長崎県波佐見町と山内町・有田町の境にある庵寺（有田町）の境内に大きな槇の木がありました。その側に波佐見町教育委員会で建てられた標柱があり「藩境の一本杉の跡」と書いてありました。藩境といえば上南山の三領石がよく知られていますが、この場所には江戸時代に佐賀藩・大村藩・武雄邑の境を示す杉の木があり、それが文化年間に枯れて石柱に代わったそうです。そこからは国見岳や大神宮、黒髪山などが一望できました。車で簡単に行くことができますが、できれば歩いて登ってみられることをお勧めしたい場所でした。

ンベジャラ

11月３日にＪＲウォーキングの皆さんが100人程三々五々来館された。奥・有田駅長の特別の計らいで当館をコースに入れていただき感謝している。

11月18日（土）開催の「東京有田会」（会長山本兵蔵さん）は70余名の出席で盛大に行われ、当館より送付していた「有田の民俗」「有田皿山写真館」が、またたく間に売れ切れ、幼少期の自分の姿を見て大賑わいとなったそうだ。その後、当館へ追加注文が来ており、東京有田会の幹事にお礼申し上げたい。

現在開催中の「川浪養治」展は、前期が12月３日、後期が12月28日までとなっている。素晴らしい作品ばかりである。やきもの作りの人は勿論、特に小・中・高校生に是非見てもらいたいものです。

最近は韓国をはじめドイツなど海外からと、仙台・秋田など遠来の客が見えている。来る人は殆ど「やきもの」が好きな人達で、参考館の陶片をじっくり時間をかけてご覧いただいている。有田の魅力はこういうところにもあるようだ。

困ったことがある。それは企画展を始めると、常設展示の道具類や陶磁器を撤去し、企画展示を行っている。そこに「やきもの」好きの人が来た時である。

期待に答えるためには、参考館１階の空きスペースを活用することで解決できるのだが。町財政に余裕があったらなあとつくづく思い、晩秋の空を仰いでいる。

（久富）

写真で残す ふるさと有田
＝作品を募集しています＝

当館ではこれまで過去の歴史を振り返り、資料の蒐集・研究・発表をしてきましたが、町民の皆様の協力を得て、現在の有田の「くらし」「自然」を記録に留め、次世代に残していきたいと考えています。

このため、今春「写真で有田を記録する会」を発足し、皆さんからの作品を募集しています。

募集要項は次の通りです。皆さんの作品を心からおちしております。

①対　　象　有田町民、有田町内の事業所に勤務する人
②題　　材　すべて自由（学校行事、祭り、生涯学習等）
③募集期間　平成13年２月末日まで、作品は町内の写真店を通じ提出ください。
④作品発表　平成13年４月中
　　入賞者には町長賞などがあります
⑤作品保存　作品はすべて当館で保存されます

季　刊『皿　山』

通巻48号（平成12年12月１日）
編集・発行　有田町歴史民俗資料館

〒844-0001　佐賀県西松浦郡有田町泉山1丁目4-1
☎0955-43-2678　FAX0955-43-4185